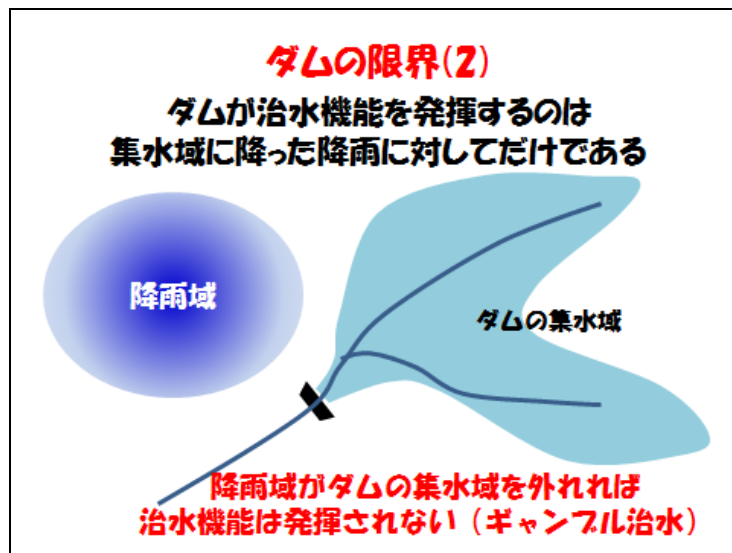


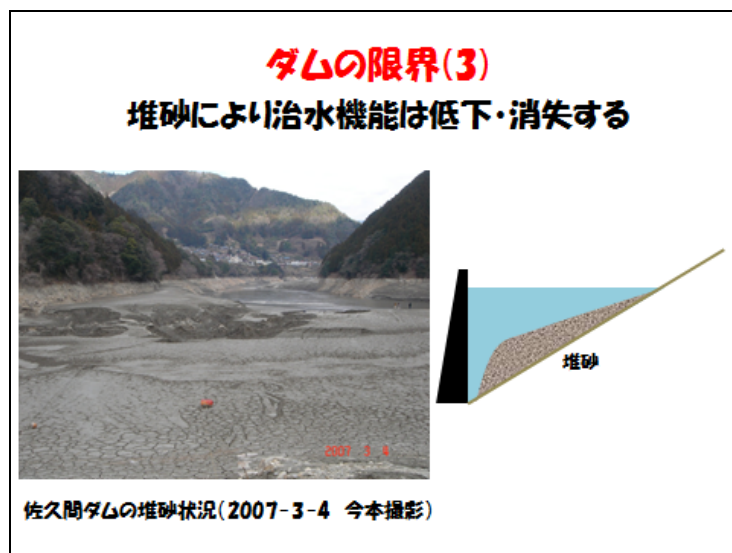
## 17 ダムの限界(2)

ダムが治水機能を発揮するのは集水域に降った降雨に対してだけである。降雨域がダムの集水域を外れれば治水機能は発揮されない。「当たるも八卦、当たらぬも八卦」の「ギャンブル治水」といわれる所以である。



## 18 ダムの限界(3)

ダムは、堆砂により治水機能が低下し、数十年から百年余りで消失する。現在、堆積した土砂を排除する検討が行われているが、効果的な方法は見出されていないうえ、実施には多大の経費がかかるうえ、既設のダムのすべてに適用するのは到底不可能である。



## 19 ダム：建設する時代から撤去する時代へ

これからは、堆砂により機能を消失するダムが続出するだけでなく、社会情勢の変化により不要になるダムも続出することになる。

ダムの建設時代が終り、撤去の時代が始まるのである。2012年9月1日に撤去作業が始まった

荒瀬ダムはその<sup>さきがけ</sup>魁である。



## 20 豊川の治水

豊川水系の治水をどうすればいいかを考える。

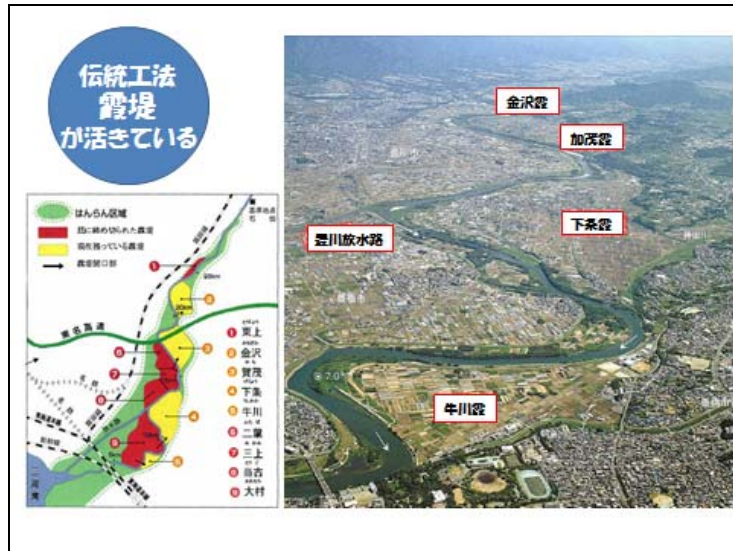


## 21 伝統工法が活きている

豊川水系の治水には、下流の霞堤に見られるように、江戸時代の治水をリードした伊奈流の技術がいまに引き継がれている。

伊奈一族は徳川家康に引き立てられ、関東郡代として江戸時代の河川改修の一翼を担った。その子孫の伊奈紘氏が豊川の流域におられ、いまの治水にも発言をしておられることに歴史を感じる。

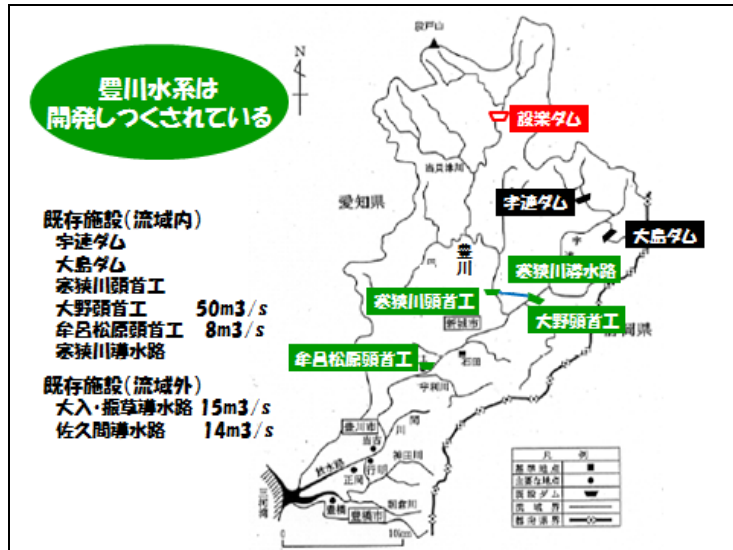
霞堤は、治水に役立つだけでなく、自然環境を育むうえで重要な役割を果たしている。それにもかかわらず、豊川放水路の完成によって豊川右岸の霞堤をもはや不要としてなくなってしまったのはきわめて残念である。



## 22 既存施設はすべて農水省管轄

豊川水系には、流域内の既存施設として、宇連ダム、大島ダム、寒狭川頭首工、大野頭首工、牟呂松原頭首工、寒狭川導水路があり、流域外の天竜川水系からも大入・振草導水路や佐久間導水路を通じて導水されている。

しかし、これらはすべて農水省の管理施設である。河川管理者の国交省としては自前の施設を持ちたくて設楽ダムを計画したと噂されるほど、このダムの必要性には疑問が多い。



## 23 豊川水系の利水

豊川水系の利水は、水系の水だけでなく天竜川水系の水まで引き入れ、流域外の渥美半島などまで潤している。この地域にとってまさに「命の川」である。それだけに、さらなる開発を目指すのは理解できなくもないが、社会の変化とともに水需要の状況も変化し、水利権の転用や利水システムの見直しにより「さらなる開発が不要」となれば、話が違ってくる。

そのような検討がなされることなくダムの建設に走るとなれば、ダムをつくるのが目的化されているとの批判が出るのも当然である。